



学校便り 4月号

かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008
発行 令和6年4月19日 責任者 校長 永野 俊也

学校HP



学校ブログ



里周辺海水温
21℃(3/30)

春に

校長 永野 俊也

この気もちはなんだろう 目に見えないエネルギーの流れが
大地からあしのうらを伝わって
ばくの腹へ胸へそうしてのどへ
声にならないさけびとなってこみあげる この気もちはなんだろう ~

谷川俊太郎氏の「春に」の一節です。もともと中学校の音楽教師であった私は、思春期の子供たちが、成長とともに感じる春のエネルギーと、自分たちのなんとも言えないもどかしさを表現したこの詩がとても好きで、この詩をもとにした合唱曲をよく取り上げ子供たちと歌っていました。時に立ち止まろうとしても、あふれる春のエネルギーは、子供たちを未来へ誘ってくれる。そういう気にさせてくれる詩と音楽です。(裏面へ、詩の全文を掲載しておきます。)

令和6年度がスタートしました。新たに5名の新入生を迎え、全3学級、全児童34名、教職員数10名による船出となります。里小学校153年の歴史の中で、1・2年、3・4年、5・6年と完全複式学級で3学級というスタートは初めてのことであり、これで甑島すべての小学校が完全複式となりました。「不易と流行」という言葉があります。里小学校の伝統や建学の精神など継承していくもの(不易)と、ICTをはじめとした新しい教育方法など、時代とともに変化していくもの(流行)とバランスを取りながら、新しい時代に対応していく能力が、学校にも求められます。

私が赴任した令和3年度は、日々の授業を担当する教員は8名でしたが、今年度は3名、学校のみで分担任する仕事量は変わらない上、授業の準備は2学年分となるため、先生方の負担はとて大きくなります。そのため、昨年度から学校運営協議会にも図りながら、今年度に向け様々な準備をしてまいりました。まず4月は、昨年度まで行っていた家庭訪問をなくしました。コロナ禍を経て、玄関先で行われていた家庭訪問を、教育相談週間に全家庭と学校で相談を行うことで、授業数確保につなげました。また、4月の放課後に、各担任の先生方は、子供たちの下校に同行する期間を設けることで、通学路上の危険箇所や、自宅の位置などを把握するなどの工夫も行っています。学校の日課表も工夫し放課後の時間をこれまで以上に確保しました。子供たちとふれあう時間や教材研究、教育相談等の時間に当てられます。PTAの規約や構成も、昨年度から見直しを続け、P戸数の減少やほとんどが共働き世帯である昨今の状況を踏まえ、今後無理のない運営ができるよう工夫されています。

このように、今年度は里小学校の将来を見据え、大きな転換点となる年度となります。数年後には、里幼稚園の上甑中跡への移転統合も決まっており、幼小合同のP戸数のさらなる減少も見込まれます。昨年度それらを見通し、準備してきたことを今年度試み、不具合があればそれを修正し、時代に即した新しい学校のスタイルへ、スムーズに移行していけるようにする。そのことが、残された時間、私がこの里小学校で果たさなければならない最大の役割だと思っています。なにとぞ、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

もう一つやっておきたいことがあります。里の歴史遺産の一つである戦没者慰霊塔ですが、戊辰の役以降亡くなられた196名の方の名が刻まれています。建てられた当初は、掘られた名前に塗料が入っていたはずですが、それが全部落ちてしまい、風化が進みつつあります。この場所は、薩摩川内市本土の小学4年生がアイランドウォッチ事業で訪ね、戦争の歴史を振り返り、平和について考える場所にもなっています。本校も今年度は5月21日にここで平和集会を予定しています。市の許可は得ていますので、コミュニティ協議会と協力し有志を募り、刻まれた芳名に塗料を入れるリニューアル作業を行いたいと考えています。5月の連休後の休日、天気と地域行事の状況を踏まえ、呼びかけたいと思います。多くの方が、ご先祖にあたると思います。時間が許すようであれば、親子で参加してみたいかがでしょうか。多数の方の参加をお待ちしております。

入学おめでとうございます!

今年度は、3名の新入生を迎えての入学式となりました。

コロナ禍も落ち着きをみせ、久しぶりに来賓をお迎えしての賑やかな入学式となりました。1つ先輩となった新2年生がお祝いの言葉を述べ、打楽器や鍵盤ハーモニカですてきな演奏を行ったり、なわとびを披露してくれたりしました。新1年生のかわいらしい姿が、とつても輝いていました。地域のみなさまも子供たちの健やかな成長を、どうぞ声援ください。



【令和5年度教職員】

校長	永野 俊也
教頭	森山 慎一
1年担任	塩田 聡子
2年担任	中村 可愛
3・4年担任	吉見しほり
5年担任	中原 純人
6年担任	諏訪園盛人
養護教諭	瀬戸口佳代子
栄養教諭	川南 秀夏
事務職員	高橋健太郎
学校主事	小川 隆薫
学校司書	石原 美姫



【児童数】

1年3名	2年8名
3年4名	4年8名
5年10名	6年8名
合計41名	

5月行事

- 9日(月) 生活リズム指導週間(～15日)
内科検診(1～6年)
- 13日(土) スケッチ大会
- 14日(日) 耳鼻科・眼科検診
- 16日(火) 人権の花運動開会式
- 17日(水) 体力テスト 歯科検診(1年)
- 18日(木) 授業参観(5・6校時)
- 22日(月) 給食週間(～26日)
- 23日(火) 原子力避難訓練



一年生を迎える会



一年生を迎える会が行われました。会の最初は緊張した様子だった一年生でしたが、他の学年の読み聞かせを聞いたり、ゲームに参加したりする中で笑顔が増え、会を楽しんでいる様子が見られました。上級生の優しさあふれる、温かい会になりました。

大型連休です

三年ぶりに行動制限のない大型連休となります。それぞれのご家庭で計画を立てていることと思います。毎年、この時期には小学生の事故が増える傾向にあります。連休中は交通事故や海難事故等に十分気をつけて楽しんでください。また、熱中症にもご注意ください。

今月の付録

*今年度も時間を見つけ、150周年記念誌の補遺として「付録」を裏面に書いていきたいと思います。ぜひ、親子で読んで楽しんでください。

春に

作詞：谷川俊太郎
作曲：木下牧子

この気もちはなんだろう
この気もちはなんだろう
目に見えない エネルギーの流れが
大地から あしのうらを伝わって

この気もちはなんだろう
この気もちはなんだろう
ぼくの 腹へ 胸へそうして
のどへ 声にならない さけびとなって
こみあげる この気もちはなんだろう

枝の先のふくらんだ 新芽が
心をつつく
よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかもやすらぎがある
あこがれだ そしていかりがかくれている
心のダムに せきとめられ
よどみ 渦まき せめぎあい
いま あふれようとする

この気もちはなんだろう
この気もちはなんだろう
あの空の あの青に手を ひたしたい
まだ会ったことのない すべての人と
会ってみたい 話してみたい
あしたとあさってが 一度にくるといい
ぼくはもどかしい

地平線のかなたへと 歩きつづけたい
そのくせ この草の上で じっとしていたい
声にならない さけびとなって こみあげる
この気もちは なんだろう

*「春に」演奏 で検索をかけると、多くの団体の歌声を聞くことができます。
ピアノ伴奏もうらかな春の日差しを感じさせる透明感があり素敵な作品です。
ぜひ、ご視聴なさってください。

南九州の縄文人を瞬殺した 鬼界カルデラの破局噴火！

～甕島 縄文人の起源を考える！～

150周年記念誌で、甕島の祖先は南方系なのかそれとも北方系なのか結論は出ていませんでした。今回はそのことに関連するお話です。
学校は、多くの子供たちの命を預かる場所ですから、防災に関し様々な情報を集めると同時に、気になることについては勉強します。それらの学習の中で気にかかった**破局噴火**について、ふれていきます。破局噴火とは、地球規模の環境変化や生物の大量絶滅の原因となりうる巨大噴火のことです。



噴火の後、巨大な陥没地形[カルデラ]を形成することから**カルデラ噴火**と呼ばれることもあります。驚くべきことに、地球の歴史を数万年遡ってみると、破局噴火は九州地方、特に鹿児島県で多く起こっているのです。最も近い時代の噴火は、およそ7300年前、薩摩半島の南方50kmにある**鬼界カルデラの破局噴火**です。

鬼界カルデラは、噴火後海に没しているためその全容は近年まで明らかになっていませんでした。それが2019年以降、海洋開発研究機構と神戸大学との共同調査により、その全容が見えてきつつあります。

噴火の規模は、過去1万年の地球で最大の噴火でした。噴火の際発生した800℃にも達する火砕流(アカホヤ火砕流)は、時速300kmもの速度で海上を走り、薩摩半島と大隅半島に上陸、その南部を焼き尽くします。近くにあった屋久島では、九州最高峰宮之浦岳山頂(1936m)にまで、火砕流はかけのぼります。また、その時発生した津波は30mの高さに達し、薩摩半島、大隅半島を襲ったと考えられています。その後は、大量の火山灰が九州全土を覆い、およそ1000年もの間、生物が住めない環境になってしまったようです…。想像を絶する恐ろしさです。

では、その頃の南九州の人々はどういう生活であったのかということ、ちょうど縄文時代早期にあたります。昭和61年、現在の霧島市東部の標高250mの台地で**上野原遺跡**が発見されたことにより、約1万600年前には定住生活を行いムラを形成し、多彩な縄文文化が花開いていたことが伺えるようになりました。この発見は、「縄文文化は東日本で栄えて西日本では低調だった」という当時の常識を覆す衝撃的なものでした。ところがです、この噴火により九州に住めなくなった縄文人は忽然と姿を消してしまいます。次に人々が戻ってきた1000年後では、土器の形状が異なり別系統の縄文人が移り住んだと考えられています。ではどこへ行ってしまったのでしょうか???

世界史に視野を広げてみると、この縄文早期の縄文文化は世界的に見ても優れた文化であったと評価されるようになってきています。また世界各地の文明が、この鬼界カルデラ噴火後に生まれていることから、九州に住めなくなった縄文人は、海を渡り世界各地に散らばり、いろいろな地域の人と結びつき、やがてそれぞれの地域風土に合った文明を築くようになったと、まるで都市伝説のような学説まで最近は目にするようになってきました。また、丸木舟をつなげた双胴船は、台風のような荒波でも転覆を免れ、土器で雨水をため飲み水を確保し、魚を獲り食料を得ることで、この時代でも遠洋航海は可能であったという研究もでています。



鬼界カルデラ形成の想像図

全国広しと言えども、縄文遺跡の上に建っている校長住宅なんて、里小ぐらい？ と考えるとなんともロマンがある気がします。夜寝るとき目をつむると古(いにしえ)の縄文人の声が聞こえる気がします(本当に聞こえたら、絶対怖い……)。

せっかくですから、九州の他のカルデラについても、その歴史と影響を次号で簡単にふれたいと思います。私たちの祖先は、絶滅をもたらす自然災害を乗り越え、この地に根を降ろしたことに感動を覚えます。

また、この文章を書いて、次の連休では**上野原縄文の森**を久しぶりに訪ねてみたくなりました。最新の研究成果が公開されているかもしれないので、勉強してきたいと思います。(つづく)